聖木曜日・主の晩さん

2013.3.28

ヨハネ 13・1-15

今晩私たちはここに集って、聖木曜日の主の晩さんの夕べのミサをささげています。今晩私たちがここでささげるミサは、言うまでもなく、主イエスが弟子たちとともにした最後の晩餐を記念するものです。けれども、今晩のこのミサは、イエスが弟子たちとともにした最後の晩餐を記念するという意味で重要であるだけではありません。イエスが弟子たちとともにしたあの晩さんは、ユダヤの人々が、旧約の時代から祝って来た過ぎ越しの祭りの中心をなす聖なる晩さんであったと福音書は語っています。今晩私たちが祝っている主の晩さんの夕べのミサには、その背後に、旧約聖書に遡る長い歴史があるのです。

ユダヤの人々が祝って来た過ぎ越しの祭りは、第一朗読で聞いた旧約の出エジプト記に語られている出来事を記念する祭りです。ユダヤの人々にとっては、それは、彼らの祖先たちがエジプトの地から逃れる際に体験した、神の愛による、圧倒的な救いの出来事を記念する祭りです。年毎のその祭りを祝うたびに、ユダヤの人々は、自分たちに与えられた神の大いなる救いのみわざを想い起こし、神の救いに与った神の民としての自分たちのアイデンティティーを確かめ合ってきたのです。ユダヤの人々にとって、それは最も晴れがましい祭りです。けれども、その祭りの中心である記念の晩さんは、今に至るまで、第一朗読で聞いたとおりの、出エジプトの記憶から離れることのない質素な形を留め続けています。バビロン捕囚以降のユダヤの人々がたどって来た歴史は、繰り返されるその時々の世界帝国の支配の下での忍従と、祖国を失った流浪の民としての異国の地での厳しい被差別の歴史です。その歴史の中でユダヤの人々は、年ごとに、過ぎ越しの祭りを祝い続けてきたのです。イエスの時代のユダヤの人々も、ローマ帝国とヘロデ王家による屈辱的な外国支配の下で自分たちの民族のアイデンティティーの拠りどころとしての、過ぎ越しの祭りを祝い続けていたのです。私たちが今晩祝う主の過ぎ越しの晩さんのミサはそのような歴史を背負っています。圧倒的な外の世界からの脅威に曝されながら、この祭りを祝うことによって、神の救いを信じる神の民としての歴史を生きてきた人々の神を拠りどころとする信仰の歴史に私たちも連なっているのです。

ユダヤの人々が年毎のこの季節に過ぎ越しの祭りを祝ってきたように、私たちも毎年この季節に、主の過ぎ越し、すなわち、主イエス・キリストの十字架の死と復活によって新たにもたらされた神の救いのみわざを記念しています。出エジプトに由来する過ぎ越しの祭りが、過酷な歴史を生きてきたユダヤの

人々の信仰の拠りどころとなってきたように、私たちが祝うこの主の過ぎ越しの祭りが、私たちの信仰のいのちを脅威に曝すこの時代を生きる私たちの心の拠りどころとなることを願いたいと思います。

聖木曜日の主の晩さんの夕べのミサで朗読されるヨハネ福音書には、不思議なことに、肝心の聖体制定の場面が語られず、その代わりにイエスが弟子たちの足を洗われたことが記されています。これはどういうことなのでしょうか。ヨハネ福音書の記者が、最後の晩餐における聖体の制定を知らなかったわけはありません。私たちが今もミサの度ごとにいただくキリストの聖体は、第二朗読のコリントの教会への手紙が証言しているように、最後の晩餐の主の言葉に基づく、私たちの信仰の中心です。ミサの度ごとにいただく聖体のパンは、私たちのために十字架の上にささげられた主のいのちそのものです。「取って食べなさい。これはあなたがたのために渡されるわたしの体である。」との最後の晩餐の主の言葉に基づいて、私たちはミサの度ごとに、聖体のパンを、私たちのために十字架上で与えつくされた主のいのちのからだとしてこの身にいただいているのです。聖体をいただくことによって、私たちは十字架につけられて死に、復活されたイエスのいのちをこの身にいただいているのです。

ヨハネ福音書が大切な聖体制定の場面を、あえて記さなかったのは、私たちがミサのたびにいただいている聖体が、この過ぎ越しの聖なる三日間に記念され祝われることの全てを示し、与えるものであることを、大胆な省略によって強調するためです。何故あえてそうする必要があったかと言えば、私たちはミサにも聖体拝領にも、普段の生活の全てがそうであるように、慣れっこになってしまっているからです。主がそのいのちを賭けて私たちにもたらしてくださった救いのみわざを前にしても、私たちの足は、この世の生活の中を歩き回ったままの足です。私たちにはその足を完全には洗ってしまうことが出来ません。だから、イエスは自ら、この聖なる過ぎ越しの祭りを前に、弟子たちの、そして、私たちの足を洗い清めてくださろうとなさっているのです。

私たちはこの過ぎ越しの聖なる三日間の典礼を通して、私たちに与えられている、主イエス・キリストによる神の大いなる救いのみわざを記念し、祝うのです。聖体を通して私たちに注ぎ込まれる主のいのちと結ばれていることを喜び祝うのです。イエスが私たちを招きいれようとしておられる、そのような私たちの信仰の奥の間に私たちを招じ入れるために、今晩このミサの中で、イエスは身を屈めて、あの時、弟子たちの足を洗い清めてくださったように、私たちの足をも洗い清めようとしておられるのです。

ヨハネ福音書は最後の晩餐の中で、聖体の秘跡を暗示する、イエスの印象的なことばを伝えています。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。」

だから、わたしに留まりなさい。そうすれば、あなたがたはそのいのちの樹液によって、津波の被害にめげずに芽吹いた木々のように、あらゆる難局を乗り越えるいのちの力を与えられると主は呼びかけておられるのです。

私たちの信仰のいのちを脅かして止まない周囲の状況に囲まれた、私たちの疲れた心が開かれることを願いましょう。弟子たちの前に屈みこんで彼らの足を洗ってくださる主の、我が身を投げ出し、与え尽くしてくださる大らかな愛の招きを感じつつ、十字架の死を越えて復活されたこの主の過ぎ越しの夕べのミサを厳粛に、心のうちから湧き起こる大いなる感謝をもって、ともにおささげしたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭　吉池好高